

桜源郷のすがた

「基本的な考え方」

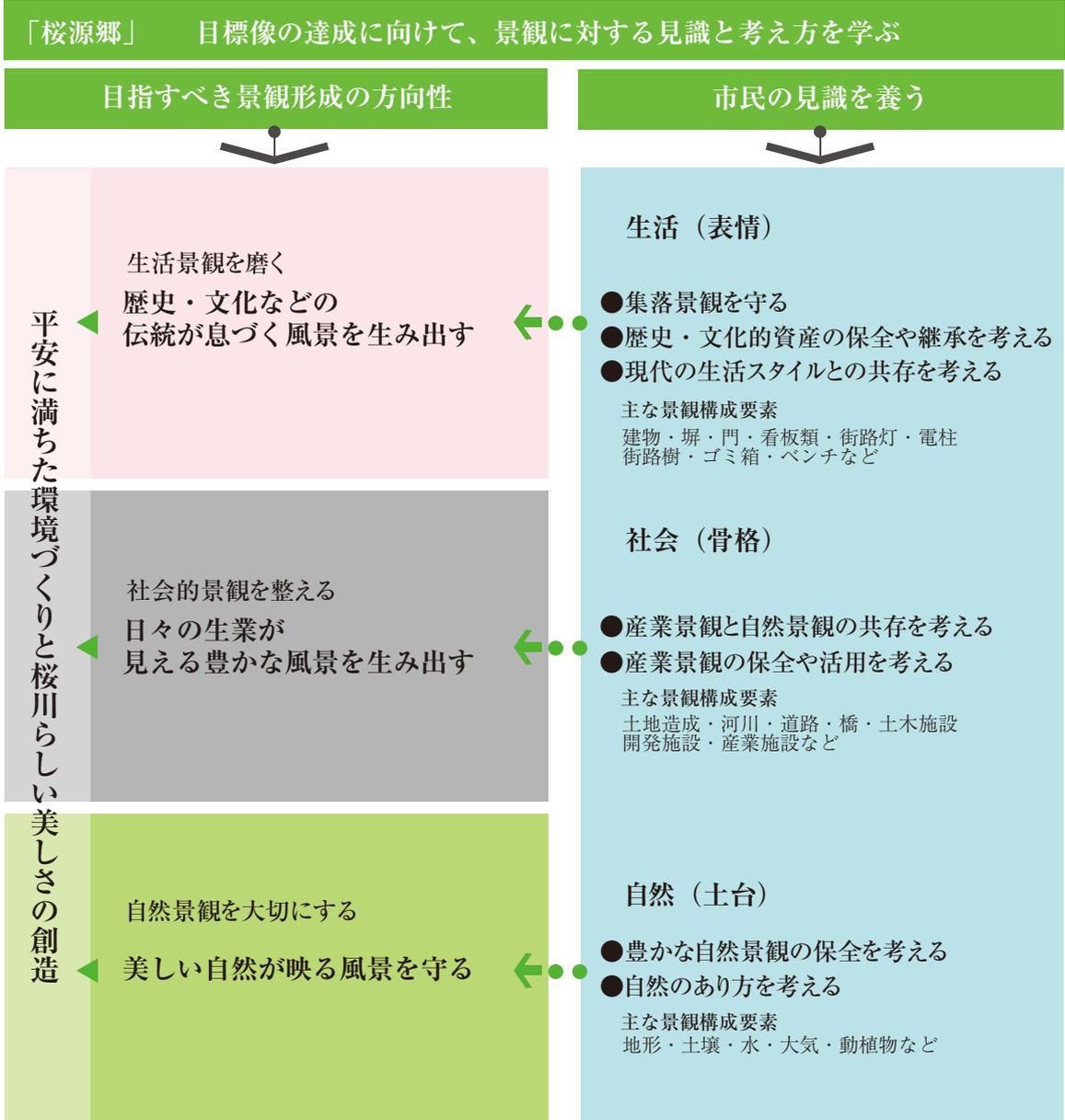
「桜源郷」
 平安に満ちた環境づくりと桜川らしい美しさの創造



唯一無二の景観

桜源郷とは、「美しい自然」と「さとやまちが織りなす風景」と「人の営み」が重なり合う姿を指す。
 自然とさととは「不動の美」、まちやみちは人の「営みの美」を表す。
 その二つの美が織りなす平安に満ちた環境は、だれもが求める故郷にほかならない。そして、それは唯一無二の桜川という土地に、固有の景観として生み出すものである。





■景観形成

理想的な景観を創出するためには、自然環境・農林業・その他の産業・生活と続く景観の生成的重要度の順番があることを十分に理解する必要がある。

したがって、生活・社会景観の立て直しに加えて、必ず自然の立て直しを図ることが、良好な景観を形成することになる。

景観形成の鍵

よりよい景観形成を図るには、「自然と人工物の共存」や「新しいものと古いものとの調和」を図るための答えを見つける見識が必要となる。

三つの目指すべき景観形成の方向性

- 景観の土台となる自然景観を最優先し、その保全・再生・維持に努める。
 - 景観の骨格を占める社会景観を保つためには、常に産業を活性化する視点をもちながら景観を整えて行く。
 - 一番身近な生活景観は、新しいものと歴史や文化の共存を細やかに図る。
- これらの、基本的な方針を基に、人＋自然＋社会＋生活の各景観要素が整うことにより「桜源郷」ができる。

次に、それぞれの基本的な考え方を示す。

■見識の重要性

見識を辞書で繙くと、一つには、「物事の本質を見通す、すぐれた判断力」とある。二つ目は、「ある物事についてのしつかりした考え、見方」とある。

本質を見通すことができるということは、複雑に絡み合う物事の判断において、間違えのない答えを見いだすための重要な能力となる。特に景観は、景観を構成する要素がたくさんある。加えて、それらを景観として捉える要件は、見る場所・対象との距離・仰ぎ見る角度・見下げる角度・視野の広さ・視野の深さなどがあり多様である。

また、景観は、気候・風土・季節・時間などの不確定な要素も絡み合う。

さらに、一番難しいのは、それらの景観を人の目で見ただけでなく、心の目で判断することで、記憶・歴史・慣習など見る人の感覚によって大きく左右される点にある。

このように、複雑な内容や状況をもつ景観をどう判断していくのか、人の見識が大

きく働くことになる。

したがって、判断をする人の能力について、そのレベルや方向性を一定以上に保つ必要がある。

そのために必要なのが、二番目の意味にある、物事についてのしつかりした考え方である。その景観についての基本的な考え方を示したものが「景観まちづくりマスタープラン」である。

■見識と景観イメージを共有する

個人のを個人が判断することは、比較的容易であるが、景観のように共有するものを多人数で判断することは大変難しい。

良し悪しを決めるには、ある程度の方向性をもって、その範囲に収まる内容での判断が求められる。景観において、一定の方向性と内容を確保するためには、「市民一人ひとりの見識力のレベルアップ」と「景観イメージや考え方の共有」が必要である。

■知識と知恵を得る

判断する力や問題を解決する力を得る基

本は、学習や体験によるところが大きい。

景観における学習方法は、特にこれと決まった方法はないが、例として、良いと思う景観をそのプロセスを含めてたくさん知ることである。特に、自身が係わる景観の対象に類似する様々な事例を見て学習することが重要である。つまり、「百聞は一見に如かず」で、先進地への視察やプロセスを知る人との交流などは、重要な見識を身につけることができる。次に、その見識を生かした実践を繰り返し、思い描く答に近づけることが重要である。このような知識・体験で得た経験を、多くもつことが最良の学習方法の一つである。

景観は、わたしたちの築いてきた様々な歴史や文化の姿である。それは、思考錯誤の繰り返しであり、様々な要因により変わるもので、変幻自在なものであることがわかる。景観の答えは一つとは限らない。日々成長する生き物のような性質があることを理解することも重要なことである。

景観形成の考え方（人・市民）

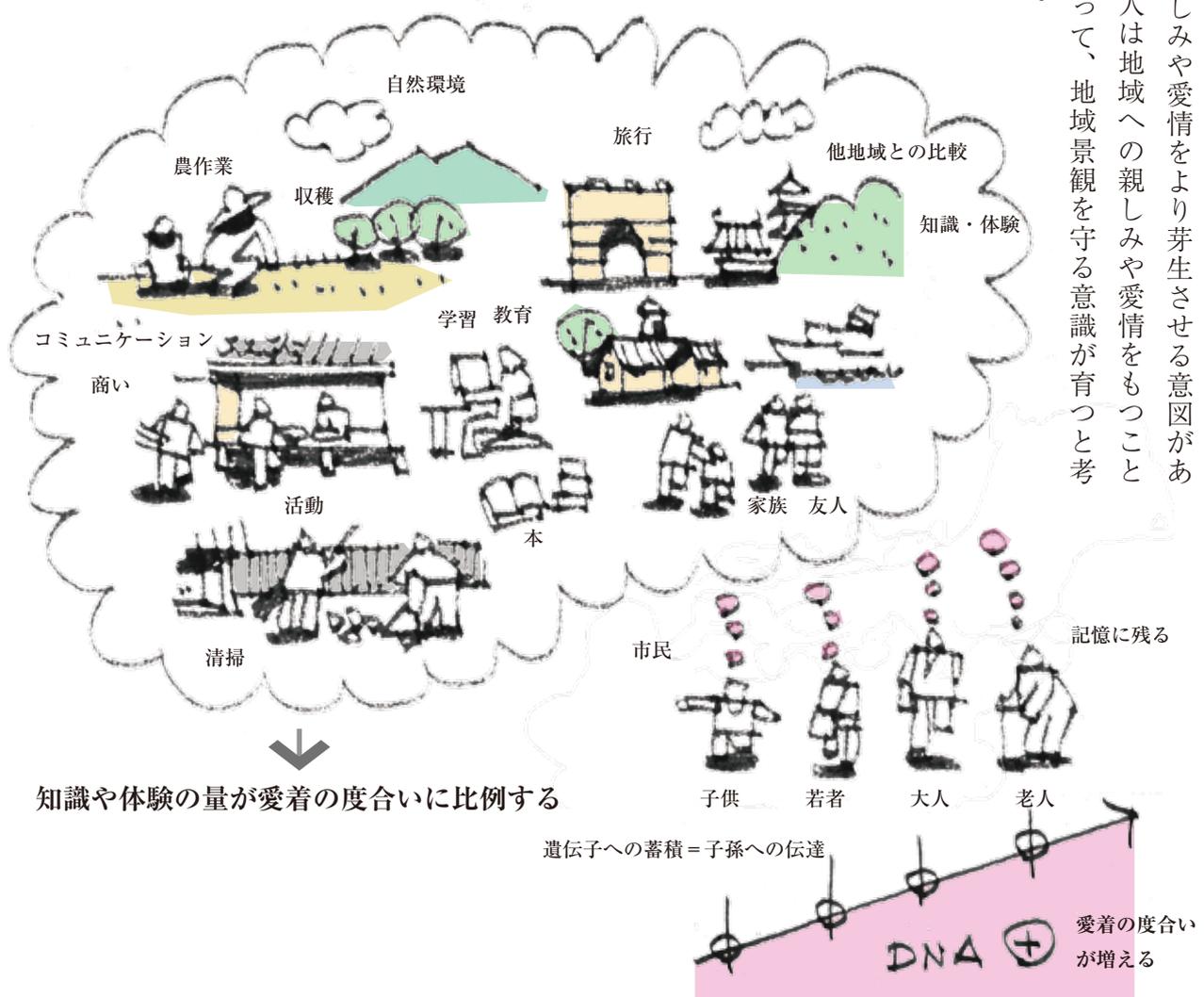
■ 地域を知る

人は得た知識や体験に対し、親しみや愛情を覚える性質をもっている。

たとえば、友人より親友と呼べる人の方が、その人の育ちや性格を良く知っている。また、旅行をした土地としていない土地では、親しみの度合いが違ってくる。このように、少しでも知ることにより、その対象に興味をもち、近づくことができる。このような性質をもつのは、知り得た知識や体験を思い起こす際に、脳内から快楽物質（ドーパミン）を発することが、最近の脳科学分野の研究によって知られているからである。同じように故郷への親しみや愛情が生まれるのも、正に故郷に対する知識や体験があるからなのである。

「桜川市の今」で触れた市の特徴は、ごく一部ではあるが、景観に係わる様々な切り口を示した知識の入口である。そこで改めて地域の景観に気づくことにより、過去の知識や体験を思い起こしたり、さらに地域を深く知ろうとする動機を呼び起こしたり、さらなる学習に導くことによって、地域へ

知識と体験から愛着が生まれる概念図



の親しみや愛情をより芽生させる意図がある。人は地域への親しみや愛情をもつことによって、地域景観を守る意識が育つと考

知識や体験の量が愛着の度合いに比例する

遺伝子への蓄積 = 子孫への伝達

学習による知識・体験による経験を得て成長する

■良い景観と判断する意味を知る

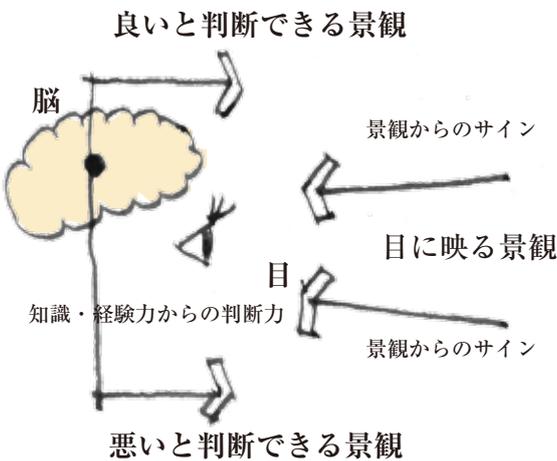
人が景観の良し悪しを判断する基準に、大きな個人差はない。共通の判断を促す性質が、感覚的に人々の心に潜んでいるからだ。それは、生物としての本能的な能力である。良いと思う判断ができる景観には、「生きる」ことを保証するサインが潜んでいるのである。

たとえば、海の見える景色・清流の川・新緑の山・紅葉の木々など、純粹な自然景観を良いと思わない人はいない。雄大に広がる田畑、花々が咲く景観なども同様である。わたしたちは、水があること、様々な生物が生存できることや、花が咲けば木の実・果物・野菜がなることを十分に知っている。つまり、これらの景観はわたしたちにとって、「生きる」ための「食べ物が手に入れられる環境を示すサイン」であることを感覚的に読みとっている。わたしたちにとって一番良い景観とは、自然環境がしっかりと保たれている景観なのである。

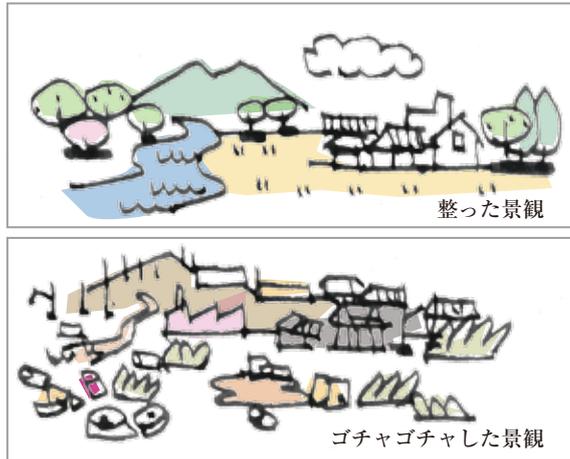
中でも水は絶対である。すべての動植物にとって水はなくてはならない物質である。人体の約七〇パーセントは水分で、体を保つためには一日二リットル以上の水分を補

給する必要があると言われる。そのため、水を目にすることができるとも美しいと感じるのである。そのた

景観と人の判断の関係概念図



景観



■キレイな景観は良い景観

もう一つ、「生きる」サインを発し、好まれる景観がある。それは、清潔感が感じられるキレイな景観である。そのサインは、体を病気から守る衛生観念から来る。汚れたものには、目に見えない菌が存在し、放置すると、命の危険にさらされることが、長い間の経験から遺伝子に記録されている。このサインは、体を守るための判断となり、不潔に見える景観は悪い景観として映る。

たとえば、ゴミが散らかった部屋・汚れたトイレなど非常に嫌悪する。この感覚は、室外でも同じで、枯れ葉・空き缶・タバコの吸殻・ペットの糞などがそのまま放置された状況を良く思わない。これらは直接的に悪い景観要素であるが、その延長上に間接的に悪いと判断されてしまう景観要素もある。たとえば、壊れそうな家・割れた敷石・錆びた看板・クモの巣のように張り巡らされた電線など、さらに、不揃いなまち並みのようなものまで、悪い景観と判断される。つまり、不要なもの・整っていないものは、実際に不衛生かどうかは別として、視覚的に衛生的ではないというサインを出しているように映る。そのためキレイに見えず、

良い景観とは思わないのである。

■悪い景観を良くする

良い景観も悪い景観も、人が決めているため、良くも悪くもできるのである。

では、悪い景観をどういうふうによくしてゆくの、大きく三つの方向性がある。

一つは、人為的に荒廃した自然、放棄地などは、自然本来の姿に戻す手助けをすることしかない。その際には、人の手が入る前の自然の植生（潜在植生）によって修復する必要がある。数年の管理手間はかかるが、本来の自然植生に戻れば、管理が不要になる。自然に戻す以外は、人の管理により自然を保つしかない。その場合は産業として再利用するための価値を生み出す知恵が求められる。林地の場合は、林業の再生、里山のシステムの復活など、生活スタイルの改善に及ぶ工夫が必要になってくる。

二つ目は、悪い景観を隠してしまう方法である。本来的には、一つ目の方法をとるべきであるが、元の姿に戻すことが非常に難しい場合がある。たとえば、採石場跡・大規模開発地跡など、自然の改変度合いが大きい場合である。

景観まちづくりでは、こうした場合の対処方法を示している。その基本は、隠して見えないようにすることである。その一番の事例が東京都の埋立地「夢の島」である。

現在は、展示場・ホテル・海浜公園・ゴルフ場など様々な施設が立地している。埋め立ての経緯を知らない人は、地下にゴミが埋まっていることを知ることはない。わたしたちは、悪い景観を自然物、一般的には樹木で隠すことにより、見た目には良い景観として映るようにつくることができる。

三つ目は、秩序観に欠けるゴチャゴチャした景観に対しては、不衛生的な見え方をなくすことで良い景観に見える。先ず掃除を欠かさないこと、常に整理整頓を行うこと、壊れたものを直すことが基本となる。次に、さらなる統一を行うことで、質の高い秩序観を見せることができる。建物や工作物などの配置・形状・色彩や素材を整えることで、格上の良い景観をつくることができる。

たとえるなら、合唱で音のパートを分けて配置したり、衣装を合わせたり、というコントロールを行っている。オーケストラも然りである。人や楽器の個性を生かした

がらも一つの音楽として統一することにより、より純粹に深く味のある音楽を伝えることができる。景観まちづくりも同じで、どんなまちを創るか、そのための「全体目標＋個性」景観を包む秩序をどのようにかたちづくるかが重要な課題となる。

■良い景観を良く見せる

良い景観をさらに良くする必要はないかもしれないが、簡単に触れる。造園の世界では、雪見障子や丸窓などにより、景色を切り取ることで、美しいものをより美しく見せるやり方がある。また、借景という手法も同様に、遠い山を周囲の地形や木々を額縁代わりにして、対象以外の物を省き、主対象物を強調し、象徴的に扱うことで印象を高めている。視野を意図的にコントロールし、象徴的に風景を眺めることができれば、感動的な美しい景観が随所に眺められるまちをつくるのが可能である。



丸窓



比叡山借景

市の面積の約半分を占める山容は、大海原の波のうねりのように続き、山懐に抱かれながら暮らす安心感を与えてくれる。

この美しく雄大な自然景観こそが、本市最大の地域景観であり、それを守ることが最も大切なことである。

特に、森の再生や活用を図ることは、動植物全体の生態系を保つために必要であり、自然との係わりが深いわたしたちの暮らしを保つためにも大変重要なことである。

■山の容姿を大切にす

関東以西の平地、丘陵、低山地の森林の自然分布は、シイ・タブ・カシ類のように葉が厚く光沢があり、冬も葉を落とさない常緑広葉樹林帯に属し、関東以北の地域ではブナ・ミズナラ・カエデ類など落葉広葉樹林帯が地域本来の自然植生である。

しかし、日本の山林を覆っているのは、スギ・ヒノキ・マツ・カラマツといった木材の使用に適した針葉樹である。江戸時代以降の造林政策による結果である。

筑波山塊も例外ではなく、標高五〇〇

メートル以下の山林のほとんどは、人為的に植林されている。今では材木としての利用がないために、人の手が入らず放置され、立ち枯れている木も多い。元の自然林に戻すか、材木として再び活用するか、大きな問題である。

自然林として再生する場合は、地域本来の自然植生による回復が図れるよう、常緑広葉樹による植林を行うことが大切である。

また、視覚的保全も重要である。毎日、目にする山の形や、耳にする山の名前は、自分たちの居場所を示す目標物のような存在となり、他の地域の人以上に愛着をもって接しているはずである。山の外形を構成する線形（容姿）を守ることは、大切なことである。

しかし、すべての視点場から容姿を保全することはすでに不可能である。主要な視点場を設定し、その場からは、容姿を損なうことのないように配慮すべきである。

山肌を彩る

花・新緑・紅葉など山が見せてくれる四季折々の色合いの変化は、山が息づいている証拠である。その一つに、国の天然記念物指定となっている「桜川のサクラ」に代表される山桜がある。他者に誇ることのできる自慢の逸品を、地域景観として大事に守り活用することが重要である。

■水を汚さない

本市は、桜川の源流域にある。したがって、その水質の良し悪しは、下流域に住む人々の生活に直接影響するため、水質を保つことが大切である。当然のことながら、主産業である農業にも直接的な影響をもつため、水質を厳しく保つ必要がある。汚染物質やゴミの投棄などは厳禁である。

人・生活・産業のどれをとっても水は欠かせないものである。ある意味、桜川は市民の命綱と言ってもよい。支流河川・用水・護岸・堰など様々な土木施設を含め、総合的に河川環境を保全・管理する必要がある。

景観形成の考え方（自然）

■山の容姿を整える

山の形を守る

山に囲まれた本市は、山の容姿によって場所を特定できる。山の容姿を日々眺めている市民にとっても、山の容姿を認識することで、本市を確認し、自分の生活場所を確認する。日本人が富士山を見て日本という国を強く認識することと同様に、市民は筑波山・加波山・富谷山などを認識することで、本市を強く認識することができる。また、ふるさとの象徴として、心に記憶することもできる。地域の山容は、市民にとって重要な景観資源といえる。

この重要な景観資源を保全する景観の考え方の一つは、山を山と認識できる外形線（シルエット）を壊さないことである。その外形線は、主に三つの線で構成されている。稜線・山際の線・山の端の線である。この三本の線によって山の形を認識することができる。したがって、大きくこの線を切ったり、崩したりした場合は、山としての認識を欠くことになる。切る原因はさまざまである。稜線の場合は山頂や尾根上の道路・

展望施設・通信鉄塔などがある。山際の線や山の端の線の場合は、大規模開発による土地造成や建造物による場合などがある。また、地震・大雨による土砂崩れなど自然災害による変形もある。土砂崩れは、放棄された植林地において、管理が十分でない場所にも起こりやすい。

生きた森をつくる

森は、集塵・空気の浄化・水質浄化の機能を持っている。また、現在問題になっている地球温暖化の元凶である二酸化炭素の吸収固定能力も大きい。

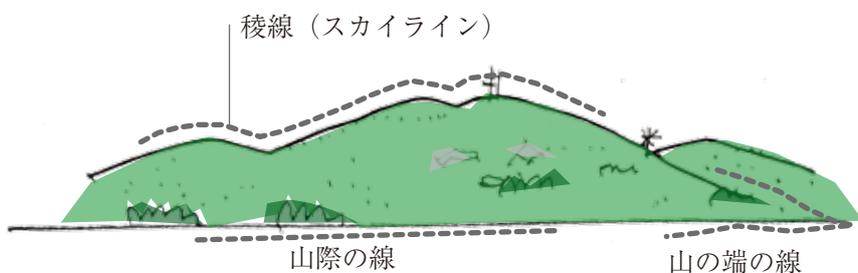
環境を守る様々な機能を備える生きた森を再生するためには、その場所に自然に存在していた植生を植えることが肝要である。地域に適さない植生は、長い時間の間に、台風・地震などで倒れたり、他の植物に変遷しながら消えてしまう。その間の森は不健康な状態となる。

自然の森は、元々地域にいた生物の生息にとっても望ましく、それらが存在する姿が地域景観の原形なのである。

人工的な森を保つ

地域本来の自然植生による生きた森をつくり・守ること以外に、植林した森を管理・利用することで山が保たれる。たとえば、かつての里山の雑木林は、燃料として一五〜二〇年に一回切られ、落ち葉は肥料として利用し、下草は一・二年に一回は刈り取られていた。また、ほとんどの建物が国産材を使用した時代の森は、生産林として育成・管理・利用を徹底していたのである。

守るべき三本の線

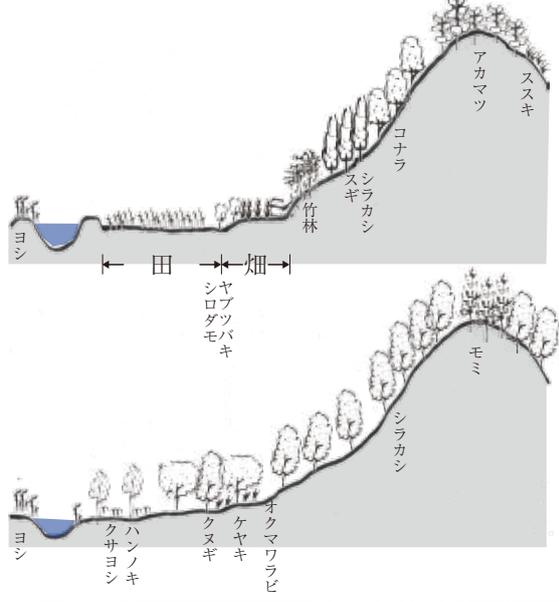


外形線が切れた状況



のである。現状では再び、木材を生活や産業の製品として活用することは難しい。限られた用途には、国産材の活用を図ることは可能であるが、ほとんどの植林地は、元の自然に戻すための努力を払うことになる。

現状植生（上）・地域本来の自然植生（下）



鎮守の森の植生を守る

筑波山・加波山などの標高五〇〇メートル以上の森林に潜在植生が残っている。また、自然を神として信仰する文化を持つ日本では、森そのものがいわば畏敬の対象になっていた。それが鎮守の森である。そこには、その地域本来の自然植生が、そのまま残されている可能性が高い。

これらの希少な景観資源を守ることは、自然環境の保全に加えて、古来からの精神文化を守り、継承する大変重要な価値がある。



鎮守の森の樹林 大国玉神社

■桜川の水質をきれいにする

桜川を主要な流入河川の一本とする霞ヶ浦は、湖沼水質保全特別措置法の指定を受けている湖沼である。この法律は、昭和五十九年に水質汚濁防止法の特別措置として制定されたものである。湖沼は、水域が閉鎖的であるため、水質汚濁がおこりやすく、元の状態に戻りにくい性質を持っている。水質汚濁防止法では、工場・事業所などからの排水を規制しているが、特別措置法

は生活系や農林水産系などの排水も規制するために設けられた特別措置である。

霞ヶ浦の水質の悪化要因には、流入河川の影響がある。霞ヶ浦は、日本で二番目に大きな湖で、漁業・飲料・農業・工業用水などたくさんの方が利用している湖である。

また、レジャーや観光の面でも多くの人を楽しませている。さらに、霞ヶ浦は常陸利根川から鹿島灘（太平洋）へとつながっている。利根川河口の銚子沖は、太平洋を北上する黒潮と南下する親潮が交錯する潮目となっており、良好な魚場となっている。この一連の水の恩恵は、人の生活だけではなく、桜川に係わる全ての生物の生命を保つ大変に重要な役割を担っている。

本市は幸いながら、桜川の最上流部にあり、市民は、一番きれいな水を利用することができ恵まれた位置にある。

しかし、市内の中流域から徐々に水質汚濁が表れ、現在の水質は、決して良好なものではない。上流域の市民として、桜川の水質が、下流域の自然・生活・産業などに影響を及ぼすことを十分に自覚し、常に川がきれいな状態を保てるよう配慮しなければならぬ。

■桜川（支流・用水路などを含む）

桜川水系のネットワークの存在を示す

桜川やその支流・用水路などの水系ネットワークは、市内を縫うように張り巡らされている。

しかし、その構造のほとんどが、掘割形式のため、通常に生活している場から川面を見ることが難しい。また、本流の沿道には荒地も多く存在しているため、人が川に



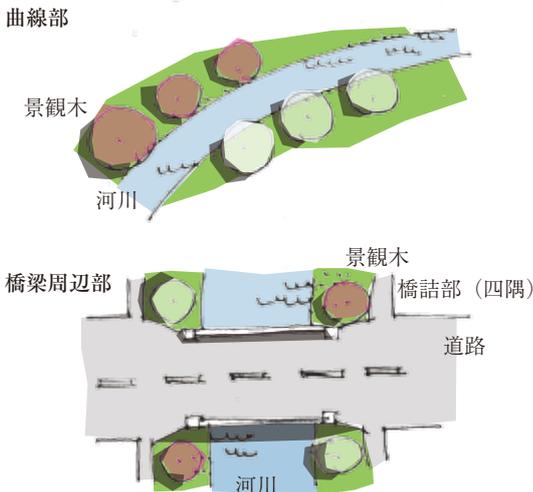
岩瀬地区内を流れる桜川

近づきにくい。大事な生活を支えている川の存在が認識できないということは、川を

景観資源として活用する機会を失わせることとなっている。

樹木を植えて河川の存在を示す

河川の護岸上部周辺に植栽を計画することで、間接的ではあるが河川位置を知らせることができる。特に桜の木と桜川は、「謡曲桜川」に謡われるように、いにしへの風情を偲ばせる効果がある。配植は、左図のように、曲線部分や橋周辺の視界が変化する場所などを中心にすると、見られる効果が高く、見ごたえも出る。したがって、少ない配植でも演出効果が高くなる。



水鏡を生かした景色を楽しむ

水面は鏡のように景色を映し出し、一つの風景が二倍に広がり、受ける印象も大きくなる。水辺に植えた植栽は、この効果により倍の量となるため開花時期は花が増える。また、水面は季節・時間による光・空・水蒸気などの様々な表情も映し出すことができる。

市内には、つくし湖や上野沼など大小たくさん沼やため池があり、水辺の親水化や修景緑化など、水面の魅力を生かすことを積極的に図ることで、美しい景観を形成することができる。ただし、水の事故が起きないように安全上の対策も十分に取る必要がある。



■自然景観との調和

ここでの対象は、産業の中でも特に農林業など広大な面積を使用するもの。次に面積を使用する都市開発・住宅団地など、さらに大規模工場・工業団地、ショッピングセンター・物流ヤード・大規模公園・運動公園などや、それらを繋ぐ道路・上下水道・河川・治水・貯水・鉄道軌道・電気・通信施設などの構造物は、大規模な土地の改変を伴うことが多い。

したがって、周辺の環境に著しい影響を与える。特に森林の減少・水質汚染・生態系の分断など自然環境に対する影響が大きい。

また、同じように、わたしたちの生活環境への影響も大きい。環境汚染・歴史的文化資産の減少・住民コミュニティの分断などにつながる可能性もある。当然、景観への影響も大きい。

それらは、自然景観・生活景観との調和が図れるような事業計画を行う必要がある。

自然へ戻す責務

すでに可能な限りの範囲で利用している林地や農地は、拡大の可能性は低い。

ここでの問題は、産業・政策・生活の変化のために使われなくなった林地や農地が管理されずに放棄されて、荒地となってしまうことにある。荒地の現況は、木の立ち枯れや倒木、雑草の繁茂、ゴミの不法投棄など、良い景観には見えない状況になっていることが多い。このような状況は、自然環境はもちろんのこと、わたしたちの生活のためにも役に立たないばかりか、犯罪に使用される可能性もある。

自然に対する悪影響は、森が本来もっている保水機能を低下させ、大雨時には土砂崩れの原因になる。荒れた農地（無管理の休耕田を含む）は、周辺の耕地に雑草の種子や花粉を飛ばし、作物に影響を及ぼす病虫害や蚊の媒介場所になったりする。

荒地の再活用ができない場合は、自然地へ戻すことが、わたしたちの責務である。

しかし、簡単に戻るわけではない。それなりの年月をかけて管理し、自然の状態へ戻していかねばならない。その方法については、専門家の指導を仰ぐ必要がある。

林地や農地に限らず、人工的に使用した土地で、その後の使用が長期的に無いと考えられる場合は、元の自然に戻す努力を積極的にする必要がある。

土地の改変を必要最小限に留める

自然環境との調和を図るには、開発面積を必要最小限に抑えることが重要である。ただし、対象地が傾斜地や起伏がある場合は、敷地面積の分割や地形に合わせる変形などを検討し、場合によっては開発面積の増加も止むを得ない場合もある。

道路などの線的な施設に対しても同じように、地形の起伏に十分配慮し、土地の改変を少なくすべきである。

そのためには、調査・計画段階での行為地の選定や施設配置作業が大変重要な意味をもつ。

■生活景観との調和 緑化を図る

主に、大規模な開発地に対して、緑化の意味は大きい。その意味は大きく二つある。

一つは、自然環境と開発地を繋ぐ緑化である。その一番の役割は、分断した生態系の保護にある。景観的にも、「分断した地形や森」と「人工的な施設」とを、やわらかく繋ぐ役割をもつ。配植は、生態系保護の目的から、地域本来の自然植生を基本に行うことが重要である。

二つ目は、対象地域内の環境および周辺地域への環境を整える役割がある。防音・防塵・防風・防火などの機能に加え、労働者には安らぎを与え、近隣の生活者には潤い感を与える心理的な効果がある。

その他にも、二酸化炭素の吸収や花の觀賞など、環境面や心理面に大きな効果が期待できる。

歴史・文化資源の保全

大規模な開発は、やむを得ず歴史や文化資源のある土地で開発行為を行う場合がある。その場合、資源の価値の大小は別として、できるだけ元の状態での保全を行うことが大切である。保全が難しい場合は、他の場

所への移設・重要な部位のみを残すなど、最善の方法で対処することが大切である。

■景観資源としての再活用

市内には、筑波鉄道の廃線跡を自転車専用道路（つくばりんりんロード）として再活用しているケースがある。当初の鉄道利用とは違った目的で活用している例である。大規模開発地でも道路でも、一度造ったものを壊すには、大きな費用と労力が必要である。また、一つの理想ではあるが、元の自然に戻す場合も、より多くの費用と労力がかかる。国内外でも炭鉱跡地をワイン貯蔵庫にした例や、工場施設の一部や機械などを記念碑として残し、公園化している例などがある。時代の変遷においてこのような産業遺産的な景観資源が見捨てられる場合において、次の生かし方を積極的に見つけることは重要である。

市内には採石を止めた採石場が数カ所存在する。これらは、本市の産業資源としての価値が十分にあるものである。このまま放置されれば景観として、悪いイメージを印象付けることになる。なんとか再活用する方法を検討する必要がある。

景観形成の考え方（社会）

■地形の改変

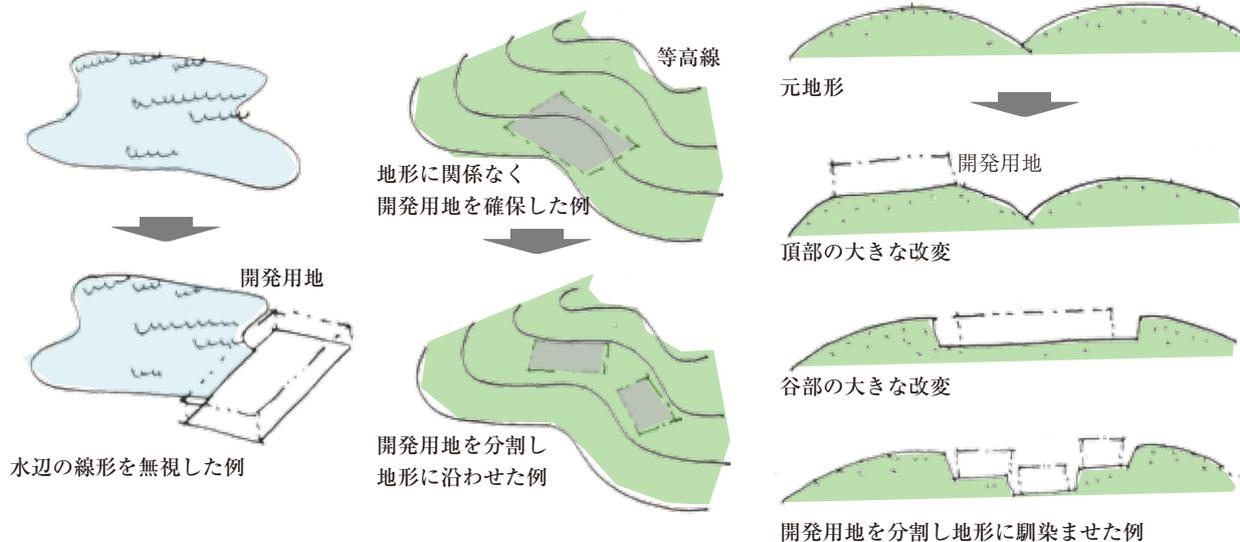
大規模な開発行為（敷地の面的改変）

自然地に新しい開発を行う場合、その行為地の地形を全く無視するか、既存の地形に配慮するか、大きく分けてその二つの方法がある。自然の景観が中心的魅力の一つで、山地が面積の多くを占める本市においては、自然地形の改変をできるだけ避け、地形に馴染ませるような計画を行うことが望ましいと考える。

起伏のある場所と起伏のない平坦な場所では、景観的な見え方が違ってくる。起伏のある場所ほど土地を平らにするために、土を削ったり、盛ったりする必要がある。そのような土地は、ほとんど丘陵や山腹など高所に位置するために、人目に付きやすい。そのため開発後は、以前の景観的印象を大きく損ねた感じを受けやすいので、地形に対する十分な配慮が必要となる。

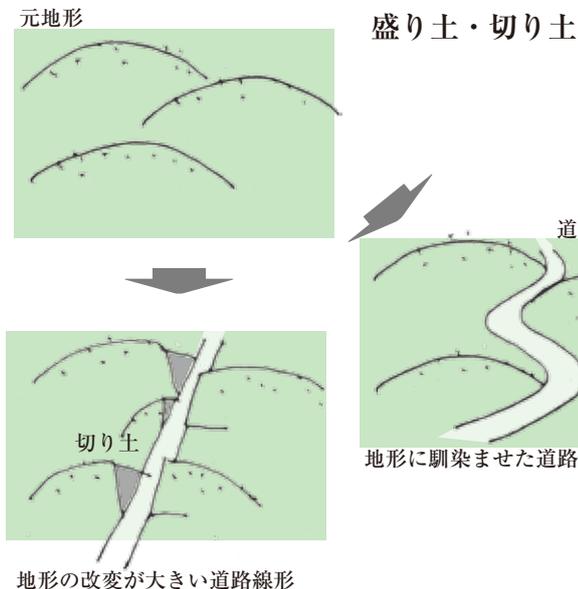
平坦な場所では、特に水辺などに隣接する場合に、景観の印象が大きく変化する。水辺の水際線を持つ自然な線形の改変を、できるだけ避けるなどの配慮が必要となる。

■地形を大きく改変する好ましくない例と比較的好ましい例



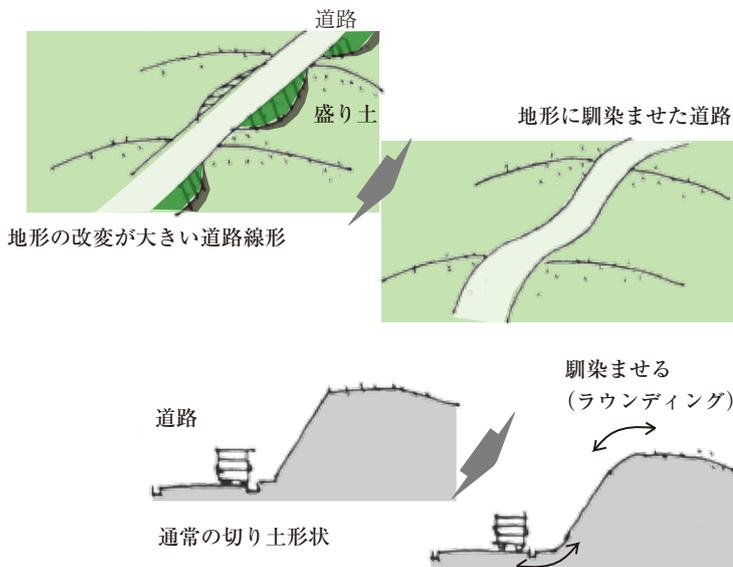
■道路・軌道類（用地の線的改変）

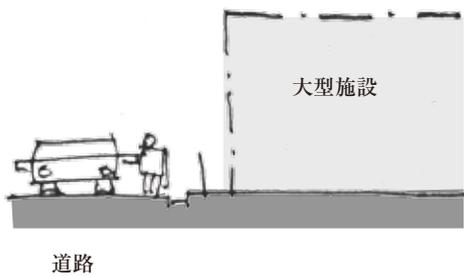
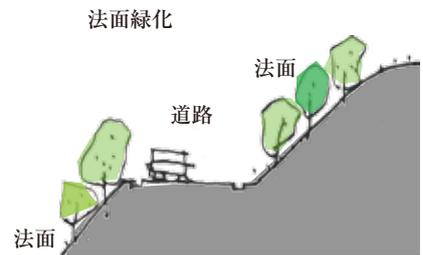
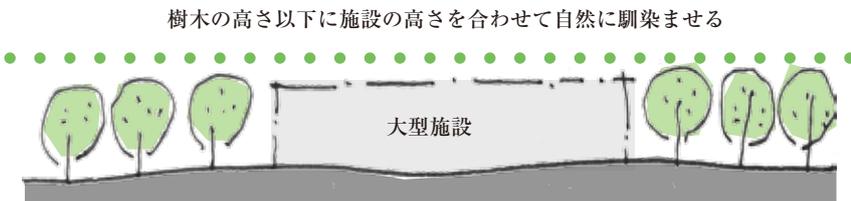
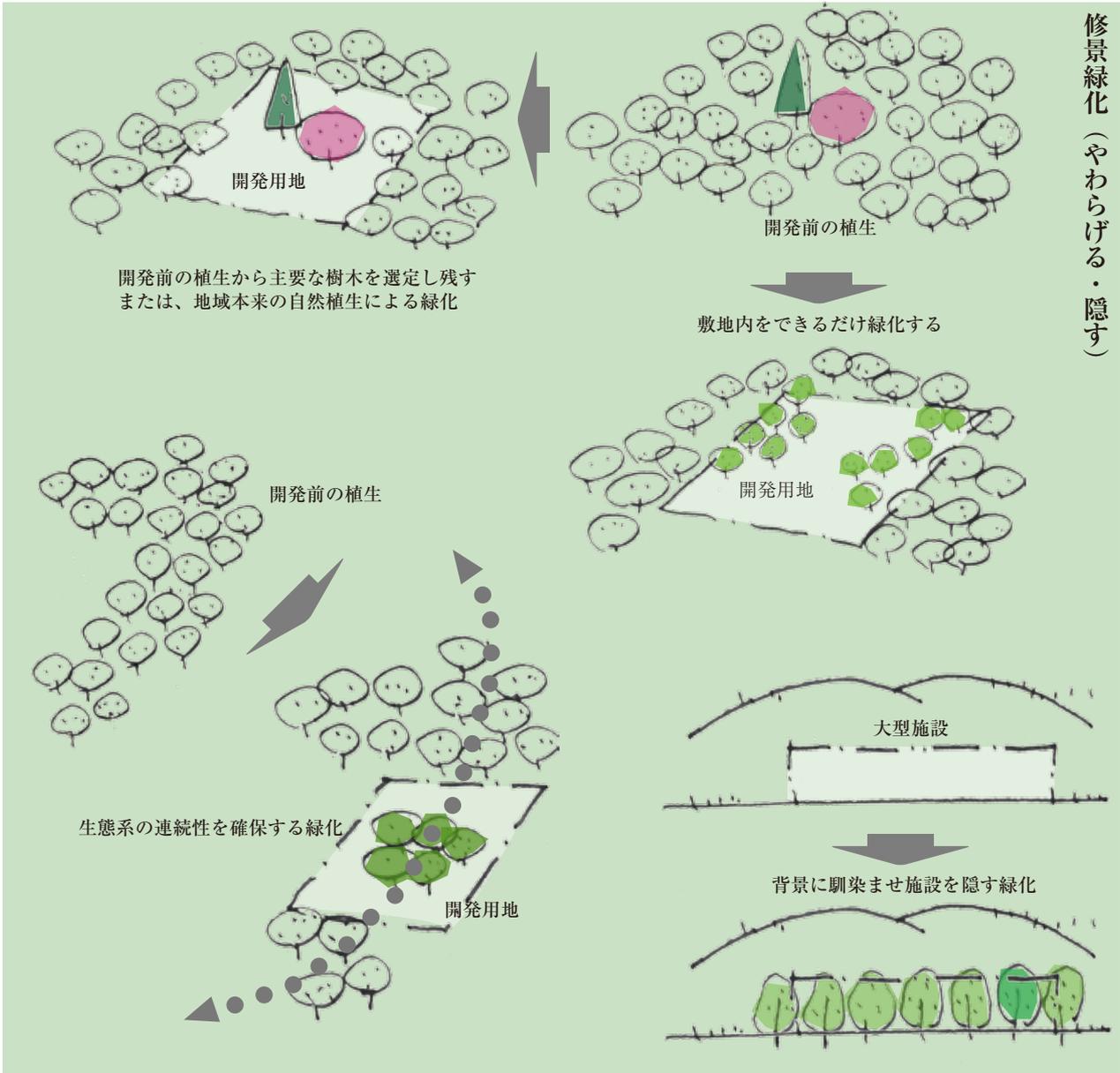
道路・軌道類の場合も大規模な開発行為の考え方と同様に、既存地形をできるだけ生かした線形を考える。図に示したように、起伏地の切り土部、谷地や平坦地の盛り土部などの地形の改変をできるだけ避けた線形を選択する。また、山腹などの道路は、自然の山肌を傷めているように見え、良い景観とは映りにくいので、できるだけ、道路本体や道路構造などの露出を避ける。道路本来の機能の確保に加え、景観に配慮するという考え方もつことが大切である。



■緑化

良い景観を形成する上で、緑化は大変重要な役割をもっている。行為地の人工的で硬い表情をやわらげる役割と隠す役割である。また、樹種や配植の仕方に対象物を強調する演出的役割を持たせた景観をつくることもできるなど、景観に寄与する効果が大い。豊かな自然をもつ本市の場合、緑化は、特に重要な景観形成の手法となる。





■演出緑化（主要幹線道路）

景観木で歓迎の意を表現する

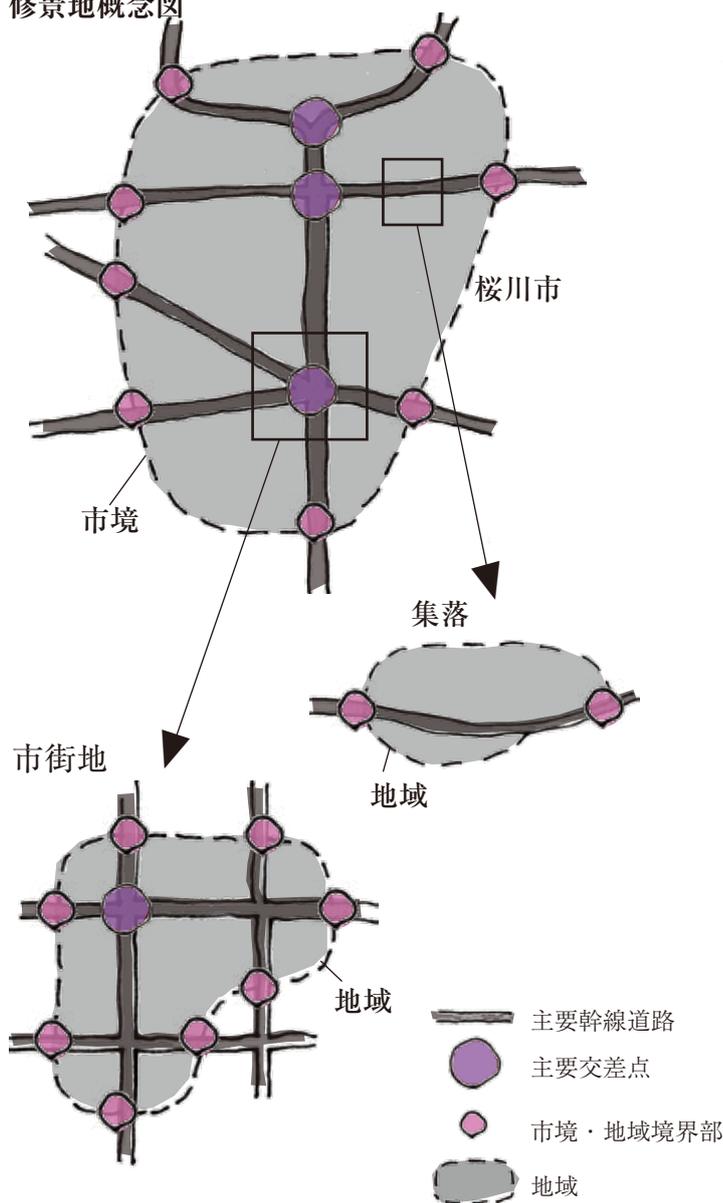
幹線道路上の市境と主要な分岐点などに、歓迎を意味する景観木を配植したり、その足元および周辺の景観を整える。こうすることによって、本市の良い印象を来訪者に与えることができる。

また、地理的な位置の認識が容易になり、地理的不安を軽減する効果やドライブ中の気分転換など、安全面や精神面での効用も図ることができる。

市民や来訪者の視点にたつ

幹線道路はまちにとって、まちのイメージをつくる役割をもつ。たとえば高級な邸宅の門から玄関へ向かうアプローチ道路の様なものと言える。幹線道路はある程度、外向けに意識すべき空間であり、来訪者は、そのまちの格式や市民の暮らしぶりを知ることができる。また、市民にとっては、常に来訪者を受け入れる心をもつことで、公共空間を家の延長として大事に思う意識を醸成することができる。

修景地概念図



したがって、幹線道路などは、市の顔としての役割をもつ公共空間として整える意識で、景観を構成する要素の質やデザインを判断する必要がある。並木を検討する場合は、積極的に花木・実・紅葉・樹形などに配慮した演出性を盛り込む。

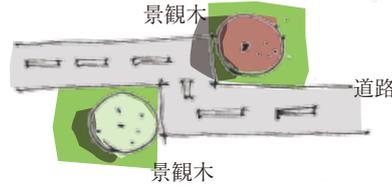


市内の桜並木

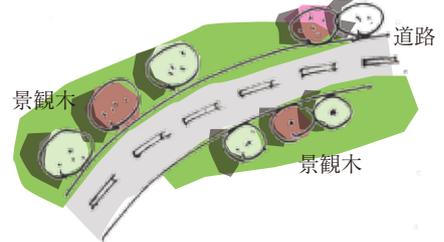
山への眺望を生かす

本市は、ほぼ山に囲まれていて、山を見ることが場所を認識する事ができる。道路の軸線上に山があることを「山アテ」道路と呼び、昔から都市計画などの手法として活用されていた。市内には、偶然にもたくさん山アテ

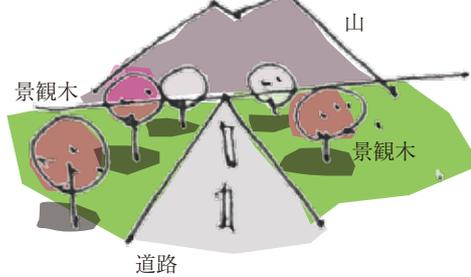
クランク部



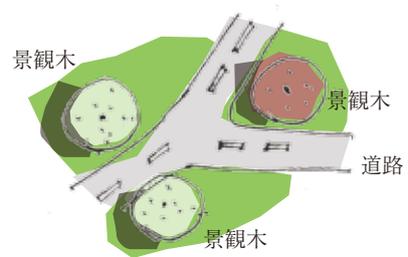
曲線部



山アテ



分岐・交差点



橋梁類

道路があり、ドライバーに印象深い景観を提供している。このような山への眺めを生かした景観を活用することは、地域性や個性的な景観を得ることになる。道路・施設などから山への象徴的な眺望をもつ主要な視点場の保全、または、活用を図ることが重要である。

橋梁は、河川・軌道・道路などを跨ぐため、周囲より一般的に高くなっている。また、視界に恵まれ、眺望景観を楽しむことができる重要な視点場である。このような場所での景観形成手法は大きく二つある。

一つは、視点場として、利用者の眺望を十分に確保することである。その観点から、周辺の景観要素に対して、コントロールを行うことが大切である。たとえば、眺望に筑波山のような地域を代表する景観要素があれば、そこへの視界をできるだけ確保するために、眺望する景観内にある建物や工作物の位置・形・色彩などについて、デザイン的な配慮を行う。

二つ目は、橋梁そのものの存在が周囲から目につくため、橋梁を望む視点場から見て、橋の構造や工作物・色彩などのデザインについて十分に配慮する必要がある。

特に本市のように自然景観に特性がある場合は、山並みや農地ののびやかな自然景観に対峙するような、ポリウムや目立つ形・色彩のデザインはできるだけ避けるべきである。

様々な視点場を生かす

市内には、廃線となった軌道が、「つくばりんりんロード」と呼ばれる自転車専用道路として再生されている。このような、土木的遺産を残し、市民や来訪者へ提供することは個性的な景観を生むことになる。

どのような場合の施設でも、再利用の可能性を探り、できるだけ活用することは、歴史的景観の保全に繋がるので、大切な景観形成の対象要素として捉えることが重要である。



旧真壁駅跡



旧雨引駅跡

■日本の原風景といえるたたずまいを守る

市内には、緑豊かな集落景観、耕地と調和した農家など、本市らしいのどかな景観が広く存在している。

市街地は、真壁地区に代表されるように、古都を思わせるたたずまいが各所に残っている。また、当然ながら、新しい建物も多く存在する。本市の固有の文化を継承・発展させつつも、現代的な生活スタイルを表現した新しいものとの共存も不可欠である。本市は、新旧が調和した景観形成を目指す。

地域性を大事にする

歴史的建造物は当然のことながら、新築する場合でも地域に伝わるデザインの継承に配慮し、できる限り従来の印象を損なわない方法をとることが大切である。新様式の場合でも周辺の建物とのデザイン上の調和に十分配慮し、新旧の調和を図ることが、両者の価値を損なわず良好な景観を生むことになる。

また、素材・工法・技術など、地域固有のものを優先的に使用し、景観の調和と地場産

業の育成に貢献することが重要である。

まち並みは地域の顔

まち並みは地域の外から訪れる人が眺め、まちの印象を決める大事な景観である。家にとえると門構えの様な場所に当たる。それらの構えが醸し出す品格は、来訪者を迎える気持ちの度合いを表すことになる。

また、市街地は、買い物などの場所として慣れ親しまれているように、地域の顔としての役割もある。その意味で、まち並みや街路を整えることは、大変に重要な意味をもつ。

まち並みは、地域の顔として、市民には誇りを、来訪者には信頼をもたらす大切な景観要素であるため、丁寧な整備が必要となる。

街路はまちの居間として整える

市街地・集落内の街路は、生活空間の延長として使用する場所でもある。たとえば、近隣同士や来訪者たちとの立ち話・打ち水・清掃・物干し・子供の遊び場などに使用したり、行事や祭事の場所として、一時的に大きな市民広場にもなる。

このような性質をもつ街路は、家の延長の空間として捉え、市民が活用し、生活・文化を支える重要な役割を満足できるように整えていくことが大切である。

招く喜び

市街地は、商いや行政サービスなどを中心に、多くの来訪者と交流する場所である。ここでは、営利的なサービスをするだけでなく、人と人とのふれあいがもたらす真心の交流によって、繋る喜びを感じる事ができる。そのような喜びのある光景が、まちの本質的景観の一つである。人とまちが生き生きと映る景観形成を目指す。

■緑を大切に育む

集落部では、伝統的に屋敷林・生垣・庭木を大切に育てている家が多い。市街地でも手入れの行き届いた庭が多く存在している。まち並みから見える緑は、訪れた人にも大きな楽しみを与えている。

市民が緑を大切に育てることで、個性的な景観を醸成することができる。

景観形成の考え方（生活）

■集落・市街地

集住の形としてのまとまりを守る

集落や市街地には歴史的な形成過程が形として残っている。たとえば、城を中心として構成された城下町、寺社を中心とした寺内町・門前町、街道を軸とした宿場町などである。農村部では、農業を生業とした集住形式として山麓・島・線状集落などのパターンがある。集落や市街地の成り立ちには歴史的な価値があり、地域の固有性を示すものである。それらは、方位・地形・水源などの関係から発生するまちの位置どり、まちの中心に据える建物、城下町であれば城、門前町なら神社などを核として、周囲に展開される町割りや町屋などが一体的に形成されている。

この形は、現在でもまちの中心として内在しているが、形の残り方は様々である。ほとんどの場合は、形の残り方が少ない。大きな要因としては、戦争による破壊、人口の増加や自動車社会による市街地の拡大などがあげられる。戦争の場合を除き問題

の本質は後者の要因における無計画性にある。無計画の意味するところは、残された形を少しでも活かす配慮に欠けていたことや城下町をつくった昔の為政者のようにまちの全体の姿を見据え、形を見定めた上で市街地の形成を行ってこなかったことにある。その結果、中心市街地の空洞化や日本中どこでも同じまちと言われるような、まちの形としてのアイデンティティ（独自性）の喪失などが起きている。こうした問題は、形を損なうだけでなく、共同体としてのコミュニティやまちへの愛着や誇りをも失うことになりかねない。

本市は幸いなことに、真壁城址の整備・伝統的建造物の保存など、歴史的な形の保全・再生に取り組んでいる。また、市域全体に存在する農村集落も、昔ながらの形を色濃く残している。今からでも形を残すこと、つまり景観的な視点で集落や市街地を捉え、特徴をもった様々な景観要素について、できるだけ計画的に保全・再生を行っていくことが重要である。

守るべき集落の形

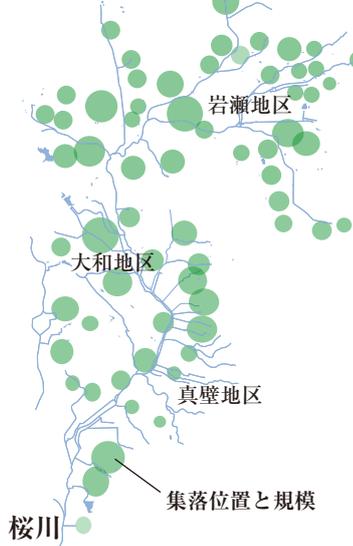
農作業や農業用水の利用を中心に、家と家とが地縁的、血縁的に結び付いた社会生

活の基盤的な地域単位において、農業水利施設の維持管理や農機具などの利用、農作物の共同出荷などの農業生産面ばかりでなく、冠婚葬祭、集落の共同施設の利用など、生活面にまでおよぶ密接な結び付きのもと、様々な慣習や祭りごとが行われている。また、自治的な活動も行うなど、一つの小さな行政単位としても存在している。このようなコミュニティを包む集落の形に保全すべき特徴がある。

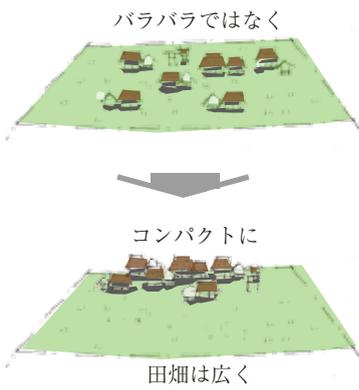
守るべき形その一

市内の集落のほとんどが、桜川水系を軸として繋がった形をしている。農業にとつては欠かせない湧水・川の出所・流れに沿って集落が存在している。市内の水は、すべて桜川の一本に集まる地形になっている。集落のほとんどがその水を利用している。集落は、まるでひと房のブドウのように一

桜川水系と集落関係図



集落のまとめり概念図



体的に結び付いている。
守るべき形その二
 集落形成の最優先条件は、水を確保できる場所であること、次に耕作地の面積を広く取る一方で、大変な農作業を協力し合うためのコンパクトな集住にある。実に合理的な形である。

守るべき形その三
 各集落ごとにだいたい一つの神社がある。天候に大きく左右される農業は、神に豊穡を願う祭事を行うなど関わりが深い。このような集落と神社の一体的な関係性を再認識し、現代生活との新たな関係性をもつ。

守るべき形その四
 集落の位置や集住形態は、主に自然条件から合理的にでき上がっている。その典型的なものとして、山麓・島・線状の主に三つの形がある。

集落形状の典型



例：大和地区周辺の集落

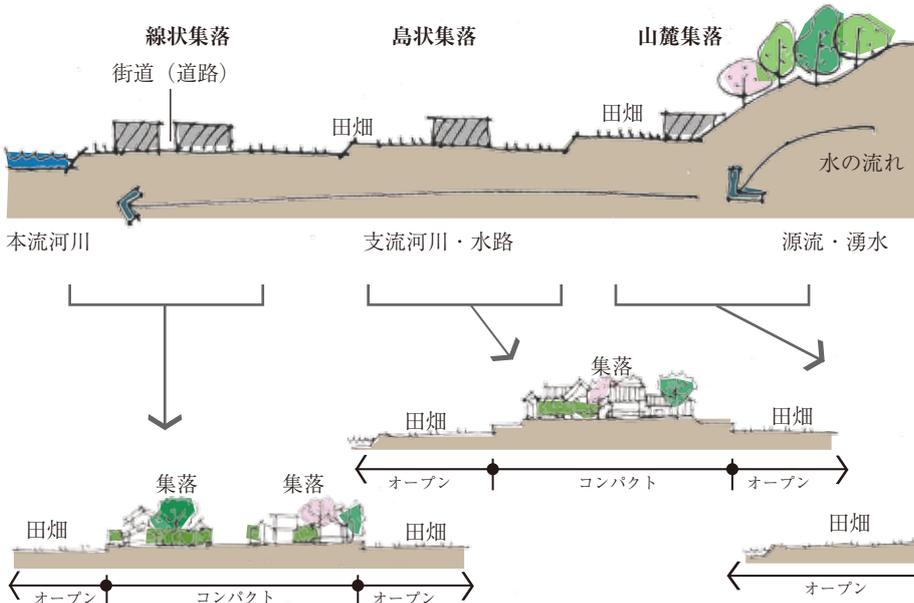
集落の外側は田畑に360°囲まれている

街道の左右に集落が並んでいる

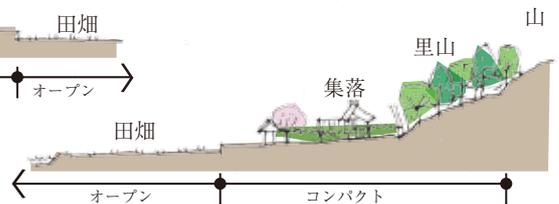
山際に押し込むように集落が位置している

各集落位置概念図

集落の形成は、山麓が比較的早く、次に島状・線状と続く。古代は川が氾濫する平地を農地に改良するための大きな技術力がなかったため、山・丘の麓に集落を形成した。後に、川の制御や盛り土、水路などの土木技術の進歩に合わせて平地に集落が形成出来るようになった。さらに、人の往来が道路の発達を生み出し、島状・線状の集落形成が生まれた。



各集落断面概念図



■まち並みを整える

まち並みは、様々な時代の建物が存在し、市街地の成り立ちなどの歴史的な過程を垣間見ることができる。それらは、俯瞰の視点場や遠景の視点場から眺めると、屋根の向き・形状・材料などが景観要素として映り、個々の違いが一目了然である。これらの景観要素が整ったまち並みは、落ち着きと秩序観を醸し出し、好ましい印象を受ける。反対にバラバラなまち並みは、魅力を感じることが出来ない。

街路景観を整える

建物の正面が、街路に揃い連続する景観は、威厳や品性を醸し出し、見る人にまちの信頼感を伝える力がある。建物の間口・構え・軒高・色彩・素材など、隣接する建物とのデザイン的共通化を図れば、さらにその力は大きくなる。また、歴史的建物が連続する場所では、特に古い寸法・様式・素材などを統一することで、歴史的魅力を保持することが出来る。

一般住宅

景観形成を考える上で最もやっかいな要素で、その主な理由は三つある。

一つは、わたしたちの生活のスタイルが

様々なことから、建物の共通化が図りにくいことがあげられる。

江戸時代は、農民が人口の約八割を占めていたそうである。したがって、農家建築がほとんどで、必然的にまとまりやすい。このようなことが望めない現代においては、意識的なコントロールを図る必要がある。

二つ目は、外国の住宅に興味やあこがれを抱く点にある。

本来住宅は、地域の気候や生活に適合し、エアコンなどの機械を使わなくても、快適に暮らすことが出来るものであった。

しかし、エアコン・暖房器具などの発達で、どんな形の家でも快適に暮らせるため、カナディアンログハウス・南仏プロバンス風住宅など外国風の家を好きに選ぶことができる。その結果、まちの姿がバラバラとなり美しいと判断できる景観とはならない。たとえば、観光客に人気のイタリアのフィレンツェ市内に日本家屋が点々と存在したら、まちの魅力を感じるだろうか、まして形だけ真似たものだとしたら、日本家屋と認めたくないと思うのではないだろうか。これと反対の事が、日本のまちで起きてるのである。住宅はファッションとは違い、

まちの景観として評価されることや日本や地域の個性・伝統を示す価値が存在することを理解してほしい。

三つ目、一番罪が重いと思われるのが、建築設計者・建設業者・販売関係者などの専門家が、建物の公的な価値を十分に認識していない点である。

この問題の解決としては、建築関係者に対する専門的教育と同時に、注文者側の意識改革も行っていく必要がある。

このように、様々な問題があるが、伝統的まち並みが美しい京都・奈良、近くでは栃木市・会津若松市、真壁地区など、たくさんの人に住宅の価値を認めさせている。こうした認識を基に、地域の住宅のあり方を専門家と共に考えていく必要がある。

参考：まち並みが美しい事例

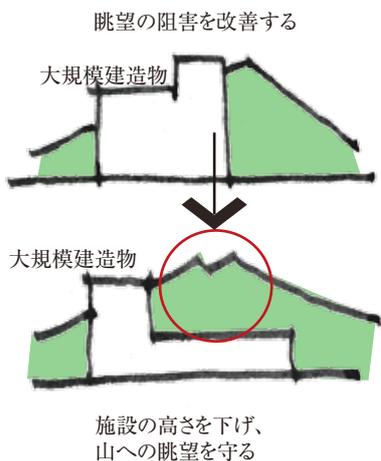
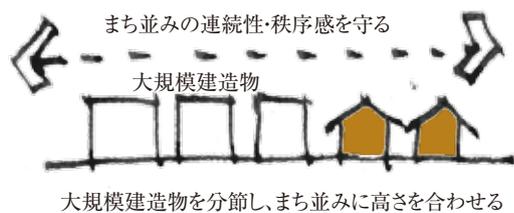


福井県丹生郡越前町

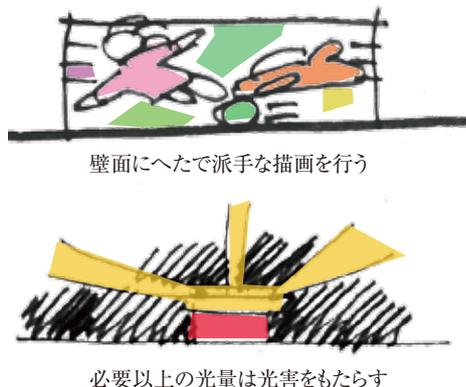


沖縄県八重山郡竹富町

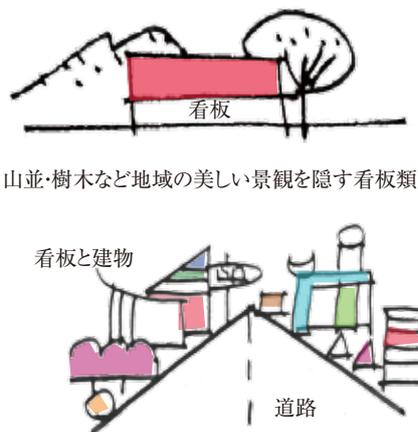
大規模建造物の工夫例



好ましくない例



看板などの好ましくない例



看板類が必要以上に目立ち過ぎ、秩序感に欠ける沿道景観

■大規模建造物を整える

本市の場合、市域のほとんどを自然的な景観が占め、大きな市街地はない。そのため、自然の美しい景観が魅力となっている。

その景観の中に立地する大規模な建造物は、規模の大きさから自然的景観を大きく損ねる可能性がある。また、歴史的なまち並みにも大きさのバランスを欠く可能性がある。計画地の選定にあたっては、自然的景観や歴史的景観との調和に十分配慮し、出来るだけ周囲の景観との融合を図ることが重要である。

良好な景観を阻害する位置を避ける

自然の景勝地（山並み・水辺）は、市民

色や素材を選択する。

のみならず来訪者にも愛されている。それらの景観をできるだけ損なわない位置・規模などについて考慮することが大切である。特に、重要な視点場からの景観地に対する景観阻害がないようにする。

大面積の色彩や素材への配慮

大規模建造物は、壁の面積などが大きい。そのため、壁面の配色や素材の選定いかんで、景観の良し悪しを左右してしまう。自然景観の中では、彩度・明度を抑え、多色相の配色を避ける。また、光の反射率が高い素材の使用を避ける。歴史的な地域も同様に、できるだけ、シンプルで落ち着きのある配色や素材を選択する。

■看板類を整える

看板類は、広告する目的からどうしても大きくなり、ハデな色使いや照明をする傾向にある。郊外の量販店などの看板や照明が顕著な例である。その他、野立て看板・フラッグ・幟・旗^{のぼり}なども同じ傾向にある。

現状では、場所に関係なく、目立つことを第一に設置している状況にある。したがって、周辺の魅力的な景観を打ち消してしまう場合も多く見受けられる。これらは、目的上、目立つ必要があるため、商業地・歴史的地区・住宅地・田園地域など、場所ごとの景観に合わせて、看板類が共存できるようにコントロールする必要がある。

■工作物類を整える

街路を構成する要素は、主に車道や歩道を覆う舗装材、電柱・電線、交通をコントロールする信号機・道路標識・ガードレールなどの工作物がある。この他、歩行者の便宜を図るベンチ・街灯・サイン（案内板・郵便ポスト）、車止めなどストリートファニチュアと呼ばれる工作物がある。これらの工作物の個々は小さなものが多いが、街路空間に連続的に配置された場合は、視野を占有する割合が高くなり、その色彩や形によって街路の雰囲気をつくることができる。

たとえば、歴史的地区では、落ち着いた色彩とシンプルな形に統一し、伝統的建造物を目立つようにしたり、商業地区では、明るい色彩とユニークな形で商業施設の賑わいを演出したりすることができる。

特別に重要な地区の景観形成を図る場合は、色彩や形のデザインをコントロールすることに加えて、視点場からの見え方に配慮した配置を行ったり、電線・電柱の地中化などを検討したり、標識・信号柱など交通管理施設類の色彩を指定するなど、街路景観全体のデザインを徹底的に統一することで、より価値の高い景観形成を目指すことができる。

■緑化を行う

市内の住宅は、屋敷林に加えて門や塀の周囲に、手入れが行き届いている生垣や庭木のある家が多く見られる。このような緑化と建物がセットの住宅景観は、昔からの慣習と趣味でつくられたもので、独特の景観と言える。このように、緑を愛する市民の気持ちがよく表れている緑化景観は、まちへの愛着や誇りを生み、物心両面の豊かさの醸成が期待できる。市民が自然に行っている緑化の推奨・評価・理解を図り、緑化が市民全体に普及できる環境をつくるのが大切である。



里を象徴する大きな桜の木
(景観木)



まちの品格を示す洒落た松の木
(景観木)

■来訪者をもてなす気持ちを表す

市内でも特に、真壁地区の中心市街地は細やかな緑の演出が各所に見られる。写真に示すような小さな鉢植えのように、ちょっとした物でも、来訪者にとって大変気持ちよいものである。特に花をつける草花や樹木は、その効果が高い。このような、もてなしの表現は、まちを彩ることに加え、来訪者と市民の心を繋ぐことができる。これ以外でも、清掃を欠かさないことや一休みするためのベンチの設置など、来訪者をもてなす様々な方法がある。このように市民の小さな心遣いを、地域文化として大きく育てるような環境づくりが重要である。

おもてなしの心を見世庭で表す



そばに近づいて庭を垣間
見ることができる



通りから門の奥の
庭を見せる



庭を開放する



小さな心使い